

ダルニー通信





2007 年度ラオス奨学金は 7,480 口分

新小学3年分は2,257口 (昨年度は2,410口)

前号でも一部報告しました2007年度のラオス奨学金は、最終的に7,480名となり、昨年度の6,971口を上回りました。新規小学3年生は2,257口で、昨年度の2,410口をやや下回りました。ご支援をありがとうございました。

学年	小3	小4	小5	小学生 計
奨学生数	2,257	2,427	2,232	6,916
学年	中1	中2	中3	中学生 計
奨学生数	134	185	245	564

世界的な傾向 経済格差が広がる

最近、日本でも経済格差の拡大が社会問題になっていますが、これはグローバリズムの結果として世界的な傾向のようです。国際労働機関 (ILO) の統計では、世界で最も豊かな20%と最も貧しい20%の収入格差が1960年には30対1だったのが、1990年には61対1になりました。また、1960年代、70年代の米国企業の社長と平社員との給与格差は60~70対1だったのが、現在では300~400対1に広がっているそうです。

本誌でしばしば報告しているとおり、タイでも都市部と地方の経済格差はなかなか埋まりません。その理由の1つとして、タイにおける国内総生産 (GDP) に占める農業の比率が23.2% (1980年) から10.2% (1994年) に低下し、輸出総額に占める農林水産品の割合も同期間に51.2%から17.4%へと大きく低下したにもかかわらず、1995年でもなお農林漁業就業者が全就業人口の53.3%も占めているからです。収入の割合が縮小している部分に相変わらず多くの労働者がいることとなります。この背景として、タイの人口は1950年の約2,000万人から3,400万人 (70年)、5,300万人 (87年) となり、現在は約6,200万人と急激に増えていますが、増えた労働人口を受け入れるだけの十分な仕事が工業部門やサービス部門にないのです。それでも、経済成長しているだけに建設現場での臨時工などの仕事はあるので、出稼ぎ労働者として一時的に都市部に働きに出、農繁期に地元に戻って農業に従事するという生活を繰り返しています。その際、両親とも出稼ぎに出る家庭が多く、その結果、ダルニー通信



ラオス・カムアン省のソンホン村の学校

41号で報告しましたが、約5人に1人のダルニー奨学生が親と暮らしていない「準孤児」家庭となります。

ラオス：急激な人口増と仕事

ラオスの人口もタイに劣らず急激に増えています。1985年に約380万人だったのが、2005年で約560万人になり、20年間で約47%増えました。一方、2006年度のGNP成長率は6.5% (推定値) で、右肩上がりの経済成長を続けています。ラオス政府は、ベトナムとタイを結ぶ横断道路が通るサワンナケート県に経済特別区を設けて外資系企業の誘致策を展開していますが、期待したほどに企業が集まらず、急激に増える人口を受け入れるだけの仕事を創出できません。その結果、子ども達は学校を終えると、親と一緒に農業に従事するか、タイなど海外に働きに行くかの選択肢しかありません (タイでもラオスでも農業で生活が成り立てばよいのですが、現状では農業への従事が貧困の繰り返しになっています)。

このように書くと、貧困の原因が人口増のように聞こえるかもしれませんが、実際は逆で、むしろ貧困ゆえの子沢山 (その結果としての人口増、それがまた貧困につながるという連鎖) ではないでしょうか。毎日精一杯の生活の中で、子どもは貴重な労働力ですが、高い乳幼児死亡率ゆえに (これも貧困の結果)、女性は若い頃に結婚して子どもをたくさん生むこととなります。体が大きくなると、小学校や中学校を中退して畑で働いたり、家事をこなしたりします。さらに長じて、出稼ぎに出て家族の生活を支えたり、きょうだいの学費のために親に仕送りをすることも期待されています。職業の選択がごくわずかであるにもかかわらず働かざるを得ないのです。

こうした状況は特別の話題性もないのでマスメディアで取り上げられず、なかなか募金が集まりません。しかし、教育支援には一定の安定性と継続性が不可欠です。このような現状をご理解いただき、今年度もタイ・ラオス・カンボジアの子どもたちへのご支援をよろしく願います。

20 周年記念で来日する 4 人の元奨学生のプロフィール

ラオスの元奨学生を初めて招へい、タイからは 1 期生とダルニーさん

今年 20 周年を迎える民際センターでは、以下の 4 人の元奨学生をタイ・ラオスから招へいし、記念式典などでドナーの方と交流します。ラオス奨学金は 1997 年からスタートしましたが、ラオスの元奨学生を招へいするのは初めてです。タイから来日するダルニーさんは 2 回目。もう 1 人のツェンチャイさんは 1 期生で、高校 1 年から 3 年間奨学金を受けました。奨学金開始当時、教育を受けられない状態が当たり前だったため、親も子も教育の重要性をなかなか理解できませんでした。そうした社会状況で、中学校に就学したい生徒を探すのが困難だったため、奨学生の選考基準を中学生に限らず、「経済的に貧しく、勉強意欲があり、学校が協力的であること」とし、勉強意欲のあった中 3 のツェンチャイさんが奨学金を受けました。

タイ 自分が得た知識で生まれ故郷に貢献したい

20 年前の 1988 年、中 3 を終えたツェンチャイさんは、高校に行きたいという希望はあったのですが、経済的に貧しい村では教育は中学校を終えれば十分と皆が考えていたため、彼女も都会に出稼ぎに行く両親に伝えていました。ところが、その年から始まったダル



ツェンチャイさん

ニー奨学金のことを学校で聞いて考えが変わり、申し込んでみました。そして合格。その知らせに「嬉しくて泣きそうになりました」と当時の感激を語ります。その後、大学に通いつつ働いて学資を稼ぎ、さらに知人から資金援助を受けて卒業。近い将来、ウドンターニー県の母校の中学校で教職に就くため、現在、サコーンナコン県（タイ東北地方）で研修を受けています。「教育は暮らしを向上させます。だから先生になりました。先生として地元で働き、教育を受けた人の生活が良くなるように貢献したいのです。」

タイ 経済的に貧しい子どもの気持ちに立って

21 年前の 1987 年、代表の秋尾がタイ東北地方を訪れたとき当時 7 歳だったダルニーさんが秋尾に「勉強を続けたい」と訴えたのが 1 つのきっかけとなってダルニー奨学金が始まりました。同級生で中学に進学したのは 46 人中 4、5 名



ダルニーさん

だそうです。高校卒業後に職業学校に進み、デパートで勤務した後、タイ事務局（EDF）に就職。「中学に就学できなければ、こうした就業の機会もなかったでしょう。現在、仕事で東北地方に出かけ、貧しくて中学に就学できない子に接する機会が多いそうです。「貧しく成績があまりよくない子でも、学校に行き勉強したいと思うはず。成績だけで切り捨てない、それがダルニー奨学金です。こうした子ども達に学ぶチャンスを提供する仕事ができ嬉しいです。」

ラオス 教育を受けた人は国の発展に尽くすことが大事

ラオス奨学生 1 期生のダオサバイさんは 8 人きょうだい。家庭は「とても貧しかった。それで先生が奨学金のことを教えてくれた」そうです。そして中学 3 年までの 6 年間、ダルニー奨学金を受けました。「奨学金を受けるようになっ



ダオサバイさん

て、勉強への意欲が湧いてきました。勉強できるチャンスが与えられたのですから、一生懸命勉強しました。」

ダオサバイさんは将来、小学校の先生になるべく現在、サワンナケート県にある教師養成カレッジに通っています。学費は、彼が卒業した小学校で教師をしているお姉さんが払っています。「教育は長いプロセスですが、必ず見返りがあると思います。私たちの国では人々が教育を受け、その教育を受けた人が国の発展のために尽くすことが大事です。奨学金を提供してくれた方への恩返しの意味でも、一生懸命勉強して良い教師になり、国の発展のために尽くしたいと思っています。」

ラオス 夢は医者、お母さんや村の子どもを治したい

「子どもの教育は重要で、できる限りのことをしたい」と考えていた両親。しかし、6 人きょうだいの 2 番目だったダウチャイさん（2 期生）の学用品を買う余裕がなかったため、先生が勧めてくれたダルニー奨学金に応募。以後 3 年間、ダルニー奨学金を受けて小学校を卒業し、その後も両親や親戚がお金を工面して中学、高校を卒業しました。「もし奨学金がなければ、小学校を退学していたかも」というダウチャイさんは、今も奨学金提供者への感謝が続いています。



ダウチャイさん

現在 21 歳の彼女は工場の食堂でコックとして働き、給料のほとんどを親への仕送りに回しています。将来の夢は医者になること。「病気がちのお母さんをまず治療して元気になってもらいたい。それに私の村は都市から離れ、生活レベルも低く、そのために子どもたちがいろいろな病気にかかっています。彼らを治療したい。」

2007 年度為替差額事業報告

1校1品事業で21校がめざす地域自給力の向上

農薬の被害に、近隣農家を走り回るソムサン校長

奨学金の為替差額から生じるお金を資金に、地域資源の活用による給食の無料提供や衰退しつつある伝統的技術の継承などを目的として、タイ東北地方の中・高校に助成金を提供しています。本年度は下の表のとおり21校が参加しました。今年3月、そのうちの4校を視察しました。その中の1校、チャイヤブーム県にあるバーン・ノンカ校では無農薬有機野菜の栽培を行っています。生徒の両親の多くは農家ですが、農薬を使って癌などの疾患にかかる率が高いことから、同校のソムサン校長が危機感を持ち、「何としなければ」と考えて、同校の菜園で無農薬有機野菜の栽培を始めました。

生徒は放課後、先生の指導を受け、果物や魚などと砂糖、水、触媒の粉（彼らはEMと呼んでいます）を混ぜて有機肥料を作り、それを菜園で育てている野菜に散布します。こうして作った野菜を使って、同校は幼稚園から小6までの生徒に無料で給食を提供しています。中学生は原則としてお弁当持参ですが、経済的余裕のない生徒は皿洗いや教室の掃除をすれば、その対価として無料で給食を食べることができます。

さて、農薬に対するソムサン校長の危機意識と行動力は大変なもので、時間があれば近隣の農家を回って「死にたくなければ、有機野菜を育てて食べる」と説いています。郡庁も農薬の使用と農業従事者がかかる疾病について関心をもっており、無農薬有機野菜の栽培トレーニングコースを開催しています。同校の先生



上段右はソムサン校長。左は魚から作る有機肥料。下段右は近隣農家のカンティさん。左は学校の菜園で有機肥料を撒く同校の先生

はこのコースに参加して無農薬有機野菜の栽培法を学びました。学校の菜園をオープンにして、生徒だけではなく生徒の両親も学びに来ることができます。これまで50~60人の近隣農家が参加し、その中に無農薬有機農法に切り替えた農家もいました。その1人、カンティさんはチンゲン菜に似た野菜等を無農薬有機肥料で栽培して一昨年は4,000バーツ（約14,400円）の収入を得ました。しかしコストがかかり、資金回収の遅い無農薬有機栽培に背を向ける農家がまだまだ多いのが現状です。ソムサン校長は「短期的な利益を優先するのではなく、長期的視点で健康と土地の利用を考え、無農薬有機栽培に切り替えるべきだ」と今日も時間を見つけて、近隣農家の説得に回っています。

無農薬有機栽培について専門家のアドバイスを求めています。ご示唆・ご教示いただける方、富田までお問い合わせ下さい。

県	学校	プロジェクト	県	学校	プロジェクト
AR	ムアンポ・ノンナムクン校	複合農業	UD	バーンドン八校	農業と給食提供
BU	バーンノンウェーン校	農業	LO	バーンファイクラティン校	ナマズの養殖と きのこ栽培
BU	バーンファイサラオ校	王室プロジェクト 関連農業	CP	バーンノンカ校	無農薬有機農業 と給食提供
CP	バーンカムポム校	水質浄化農業	NM	タノデピッタヤコム校	水質浄化農業
MK	バーンコッパームコックラン校	持続農業	NP	バーンナタオ校	養豚
NP	バーンハドクアン校	王室プロジェクト 関連農業	NM	ノンカムピッタヤコム校	バナナの茎を利用した 織物
RD	バーンドンモンサム校	農業と給食提供	SN	バーンナゲー校	農業と給食提供
SN	バンライナディ校	農業と給食提供	SN	バーンブーアイ校	蛙の養殖
SR	チャンボンウィッタコ校	ゾウの糞を利用した 織物	UD	ナッタヨム・シリワンワリ校	土壌改善と農業
UB	ナーカムウィッタコ校	王室プロジェクト 関連農業	UD	チュムチョムバーンサンベ ーン校	王室プロジェクト 関連農業
UD	バーンナワ校	王室プロジェクト 関連農業	AR アムナットチャルーン、BU プリーラム、CP チャイヤムム、MK マハサラカム、NP ナコンパノム、RD ローイエット、SN サコンナコン、SR スリン、UB ウボンラーチャターニー、UD ウドンターニー、LO ルーイ、NM ナコンラーチャシーマー		

「王室プロジェクト関連農業」とは、タイ王室が掲げるスローガン「足るを知る経済」を目指した農業事業のこと

ラオスの中南部 9 つの学校で実施しているブーンライ保健衛生プロジェクトでは、年 1 回、医師と看護婦がチームを組んで学校で健康診断を行い、病気や怪我をしている生徒に薬を投与します。



今年度、同事業に参加した 9 校のうち、一般寄付で実施している 6 校での、病気や怪我などで薬を処方された生徒は昨年度の 100 名から 83 名に減少しました。診断の結果では、インフルエンザ 40 名、扁桃腺の腫れ

の生徒が減っているのは、同事業の成果が少しずつ表れているからではないかと思えます。

卵巣癌で亡くなった生徒

今年 5 月、セーコーン県の生徒セーンメニー(写真右)が卵巣癌で亡くなりました。16 歳でした。2004 年にはじめて下腹部に痛みを感じたとき、両親は家にあった赤痢の薬を彼女に与えました。しかし、徐々に症状が悪化したため、翌 2005 年に郡病院に連れて行きましたが、医療設備が悪く、原因が分かりませんでした。そこで、隣近隣に借金をして県病院に連れて診断を受けました。その結果、卵巣に腫瘍が見つかり、すぐに摘出。いったんは回復しましたが、2 年後の 2007 年 2 月になって再度下腹部に鋭い痛みを感じたため県病院に入院。しかし、県病院には CT スキャンもなく、癌の専門家もいなかったため、思い切ってチャンパーサク県総合病院に入院して診断を受けさせました。それが唯一の治療の道だと思ったからです。しかし、すでに癌は末期症状でした。そして 5 月 16 日に亡くなってしまいました。



セーンメニーの両親の年収は約 19,000 円ですが、県病院の治療・入院代金は 44,700 円、チャンパーサク総合病院のそれは 21,711 円でした。ブーンライ基金からは限度額の 10 万キップ(1,277 円)が支給されました。

ブーンライ保健衛生プロジェクトでは、学校と校医の関係や学校での医療活動に関する行政の役割となど、システムの構築が進行中です。この点について、ご示唆・ご教示いただける方、担当の富田までお問い合わせ下さい。

ブーンライ保健衛生事業報告

薬の投与は 100 名から 83 名に、病院での診察は 49 名から 4 名に減少

ユニセフの統計では、病院や保健所など適切な衛生施設を利用する人の割合はラオスでは 30% (農村部では 20%) となっています (2004 年)。利用者が少ないのは、例えば、南部セーコーン県の場合、県病院での 1 回の診察代金がしばしば平均月収を超えてしまうからです。薬代も平均月収からすれば安くはなく、そのため 1 種類の薬しかない家庭が多いようです。病気をした場合、その薬を与えて、後はほったらかし、というケースが少なくありません。

20 名、肺炎 9 名、発熱 3 名、神経症 3 名、喉の痛み 2 名、下痢 2 名、歯痛 2 名、ヘルペス 2 名、他となっています。病院で治療を受けた生徒は 49 人から 4 人に減少しました。どちらも減少した理由を、健康診断での治療だけに帰することはできませんが、それでも病気

ブーンライ保健衛生プロジェクトご支援のお願い

2002 年にスタートした同プロジェクトは、初年度に薬箱や体重計・身長計を学校に支給し、年 1 回、医者と看護師からなる医療チームを派遣して学校で健康診断を実施します。健康診断の結果、「処方の必要あり」と診断された生徒に症状に応じた薬を支給し、さらに病院で治療を受ける必要がある場合には、1 回の治療につき最高 5 万キップ (約 600 円) で年 2 回 (合計 10 万キップ) まで支給されます。2006 年度、同事業は 6 校の小学校で実施されました (医者の治療を受けた生徒は 6 校で 4 名)。基本的には日本からの寄付金で運営されていますが、「自分たちの事業」という意識を生徒にもってもらうため、及び財政を補う理由から、生徒から 1 人毎月 500 キップ (約 6 円) の会員費を徴収しています (支払えない生徒もいます)。財政が厳しくなれば、病院で治療を受けることのできる生徒は限られてしまいます。こうした事情を考慮いただき、是非、皆様のご支援をお待ちしています。寄付は 1 口 5 万円からです。80 円切手を貼った返信用の封筒を事務局に送っていただければ、折り返し資料をお送りします。



三重県の錦中学校の書き損じはがき収集報告 はがき支援で人とのつながりや支援の充実感

2006 年度生徒会常任委員 3 年生 西村近

錦中学校では 12 月は人権週間で、日本や世界のいろいろな場所での人権問題や人権の歴史などを勉強します。その間「人権講演会」も実施し、講師をお招きして人権について学びます。また、各クラスで集中人権学習を行い、1 人ひとりが自らの人権感覚を問うたり、話し合ったりして力量を高めあっています。

学んでいく内に、世界には僕たちのような年齢の人でも、食べ物が満腹に食べられない人や、学校にも通えない人がいること、つまり基本的な人権を保障されない人がたくさんいることを知りました。そして、同時に僕たちは恵まれた環境にいることにも気がつき、何とか僕たちにできる支援の方法がないかと考え始めました。そこで、見つけたのが『ダルニー奨学金』でした。今年で支援 3 年目になります。初年度は学校内の取り組みだったので、なんとか 250 枚に達する程度だったのですが、2005 年度は「書き損じはがき」を町の人たちにも呼びかけて集めることにしました。すると、いっきに 700 枚以上集まりました。さすがは大勢の力はすごいと思いました。そのおかげで、初年度 1 年間の支援をしたラオスのワンチャイさんを小学校卒業まで支援することができるようになりました。初年度に送られてきたダルニー通信とワンチャイさんの写真を協力していただいた町の役場に展示して、感謝の意を表

して、感謝の意を表しました。僕たちはワンチャイさんの姿を見て、自分たちが頑張った結果が見えた気がしました。昨年 2006 年度も同様に「書き損じはがき」を町に呼びかけて集めましたが、昨年、家にあるはがきをほとんど協力してくれたせいか、思ったようには集まりませんでした。



しかし、僕たちの活動を聞きつけた中日新聞社の方が取材に訪れてくださって、地方版だけでなく、松阪版にも掲載してくださいました。すると数日してから県内のあちこちから『新聞を見ました。素晴らしい取り組みだと感心しました。このはがきも協力させてください。』などの励ましのお手紙とたくさんのはがきが届けられるようになりました。本当に感激でした。人の気持ちの温かさが初めて形となり、実感できました。そして、同時にメディアの力のすごさも改めて感じる事ができました。昨年はこういう経過で、結局 950 枚を超える数のはがきが集まり、ラオスやタイの子ども達の学びたい気持ちを支えられるようになりました。本当に嬉しかったです。この活動を通して、僕たちが得たことは数多くあります。今まで気づけなかった人とのつながり、だれかのために役に立てることの充実感、そして地球は同じ人間でできているのだということ。あらためて「ダルニー奨学金」制度の存在に感謝します。

「助け合い」「連帯」「友愛」の精神でタイの奨学生を支援

東急百貨店グループ労働組合は、株式会社東急百貨店を親会社とする百貨店グループの労働組合であり、東京都渋谷区を拠点に、東急田園都市線沿線のみならず、横濱みなとみらい地区、吉祥寺、町田の多摩地区や長野地区、札幌、北見の北海道地区に計十二店舗あり、その他法人、外商、通信販売などを営む企業の組合員で構成されている組織です。

当労組の社会貢献活動は、労働組合活動の原点でもある「助け合い」「連帯」「友愛」の精神に則り、毎年一回、夏のお中元時期と冬のお歳暮時期を中心に、募金活動や使用済みテレカ外貨コインなどの不用品収集活動を行っており、集められた募金や収集品は、様々な組織、団体への寄付、緊急災害時などの人道支援、地域の福祉施設への寄贈などに役立てております。

ダルニー奨学金への支援は、2003 年の組合組織の再編・活動の見直しを考えていたところ、支援活動の見える日本民際交流センターの取り組みを耳にしたのをきっかけに始まりました。また、(株)東急百貨店は「ダルニー奨学金の支援国でもあるタイ王国に「バンコク東急百貨店」として事業も営んでいることから、組合としても何かできるのでは...と思いつきました。

何もわからずスタートした 2005 年は、組合役員を中心に組合員などに積極的に声をかけ、書き損じ八力キ、未使用テレカがどれくらい集まるか不安もありましたが、結果は書き損じ八力キ 53 枚、未使用テレカ 300 枚と、まずまずの滑り出しを切る事ができました。その後も組合広報紙などを活用して広く呼びかけたところ、組合員の理解と積極的な協力により、毎年 2 名から 3 名の奨学生を支援でき、2007 年までに十名の子供たちの就学の夢を叶えることができました。今では奨学生から送られる写真や手紙などが来るたび、組合員とともにその成長ぶりを喜ばしく思っています。



奨学金への協力を呼びかけ、奨学生を紹介する広報誌

エコロジー型 書き損じはがき・未使用テレカ収集箱完成！

奨学金支援企業である OKIグループ・「OKI愛の100円募金」(100～300円をOKIグループの役員・社員が募金)からの協賛で、新しい「書き損じはがき・未使用テレカ収集箱」作製・送付セットを作成しました。何が新しいかというと、エコロジー、すなわち環境負荷削減に配慮しています。紙(木材)の使用を減らし、しかも、皆さんのお手元にある既存の空き箱を「再利用」して、切り貼りしながら楽しく作れます！ 以下の2種類の用紙がエコロジー型収集箱の1セットですが、を複数枚(同一団体・個人が複数箇所に収集箱を設置する場合)、を1枚などの送付も可能です。

収集箱作製のための切り貼用紙(A3カラー片面印刷): タイ・ラオスの子どもたちの教育事情や奨学金についての説明等が簡潔に写真付きで記載されています。空き箱に切り貼した完成物は写真右下を参照！
書き損じはがきや未使用テレカ等が換金されるしくみをイラストで説明した上に、はがき(切手に変換)やテレカを送付する際に必要な情報を記入する送付用紙(A4白黒片面)。裏面には、支援国別送付年間スケジュール情報の記載と、手作り封筒が印刷されています！

ととも、できる限り必要な情報を入れつつ、エコにも配慮した“力作”です！是非ご活用ください。



写真上: エコロジー型収集箱作製のための用紙
写真下: はがき・テレカ収集説明資料(両面1枚)



エコ収集箱の完成！

申し込みの手順

の収集箱切り貼用紙、の説明・送付用紙、各々の希望枚数を明記して、お申し込みください。

送付先の氏名・住所・ドナー番号も記載し、メール、FAX、電話でお申し込みください。

基本的に無料ですが、大量に送付する場合は、送料をご負担頂けると助かります。

カンボジアの事務所が EDF Cambodia として独立

カンボジア奨学金は2003年度から3年間、カンボジア現地のNGO「SCADP」と連携して(SCADPの一部門として)試験的に奨学金を提供してきました。そして、さらに1年間延長して2006年度でも試験的的事业から本格的事业への最終検証作業を実施しました。検査作業などで通じて把握した問題や成果を総合的に評価した結果、新規採用職員2名の能力や、4年間にわたり築き上げられた事業の実施体制や事業運営強化が確認され、2007年度からカンボジア奨学金事業をタイやラオスと同じように正式の本格的事业として開始することを機関決定しました。

あわせて今後の事業規模の拡大にともなう会計処理の独立の必要性等が高まってきたため、2007年7月にSCADPから分離独立し、新事務所をプノンペン市内に設置しました。名称もダルニー・グループの現地事務所名との整合性からEDF

Cambodiaとして、現在、カンボジア外務省に国際NGO団体として登録申請中です。12月に正式承認される予定です。SCADPとは今後ともいろいろな面での協力活動を通じて、連携していくつもりです。

奨学金の提供地域は、これまでココン県とコンボンブー県でしたが、今年度からプノンペンの北およそ90kmのコンボン・チュナン県にある2つの郡、コンボン・トララック郡とサマキ・ミンチェイ郡にしました。いずれも県庁所在地より南部(プノンペンから60km程)に位置し、幹線道路沿いでアクセスが非常によい一方、93年の和平成立後も長くポル・ポト勢力残党により支配されていたため、カンボジアの中でも貧困度が比較的深刻な地域といわれています。

「EDF」は The Education for Development Foundationの略で、「地域開発教育基金」と訳しています。

ラオス事務局の車両 14 万キロ走破

4 年前の 2003 年に三つの会社・団体のご寄付によりやっと購入できましたラオス事務局の 5 人乗り 4 輪駆動ボンネット・トラック型の自動車は、奨学金事業を始めとして、ブーンライ保健衛生事業、小学校建設事業、調査など、あらゆるプロジェクトで東奔西走の大活躍。購入以来、走行距離は 14 万キロを突破しました。

自動車が事務局になかった頃は、ラオスの事務局員は路線バスを乗り継いだり、県の教育委員会の自動車に便乗させてもらったり、移動手段がなくて野宿を強いられたりと、並大抵の苦勞ではなかったと話します。ラオスはまだ舗装された道路がほんの一部しかなく、国土の多くは山岳地帯です。悪条件の中、ラオス事務局員は仕事の効率も上がらず、雨季には雨にぬかるむ道をひたすら歩き、乾季には資金潤沢な国際機関や大手団体の自動車が舞い上げる土ぼこりを路傍で浴びながら涙したとのことでした。

自動車が保有できましたため、お陰さまで、仕事の効率も大いに上がり、ラオスの子どもたちのために、より良いプロジェクトの運営や、新しいプロジェクトの実施、調査もできるようになりました。

一方、以前と比較して奨学金の数も増え、対象地域は 4 県にまたがり、また教育支援関連プロジェクトの量、質とも飛躍的に増大してきましたため、1 台では間に合わなくなってきました。スタッフ間で融通しあって使用していますが、自動車



セーコーン川沿いを走るラオスの車両

を使用できないチームは、昔と同様の苦勞を味わいながら日々仕事にいそしんでいます。自動車を借りるにしても、ラオスでは結構高く、借りるのもままならないのが現状です。ラオスの現場を訪れ、現地スタッフの奮闘振りをみるにつけ、もう 1 台なんとかできないかと考える今日この頃です。

ラオスへ自動車を！ご寄付のお願い

当センターではラオスで使用される自動車、及びそのメンテナンス費用のご寄付を募っております。

現在、株式会社カタログハウス様からのご寄付と、ラオスプロジェクト寄付 (G タイプ寄付) を財源に検討しておりますが、あと 250 万円程不足しております。金額は問いませんので、是非皆様のご寄付を宜しくお願いいたします。ご送金先は以下の通りです。

郵便振込、振替口座: 00180 - 1 - 42721

日本民際交流センター

振込用紙の通信欄に「ラオス自動車」とご明記ください。

カメラ寄贈の受付終了のお知らせと報告

ダルニー通信 46 号 (07 年夏) で、カメラ寄贈のお願いをしたところ、予想をはるかに上回る数のカメラ約 200 台を、約 150 名のドナーの方々から民際事務局にご送付またはご持参して頂きました。必要性が一番高かったラオス事務局にまず約 150 台を持参または船便で送ったところ、同事務所からお礼のメッセージが届きました！

またカンボジア事務所には出張の際、民際事務局員らが直接数台手渡しました。残数は現地への出張や研修旅行の際、事務局員らがタイとカンボジア事務所に持参する予定です。奨学金事業を始めとする他の事業調査活動に有効活用させていただきます。

カメラ寄贈をしてくださった皆様に心から感謝申し上げます。



寄贈カメラを囲み、感謝のメッセージを掲げるラオス事務局員達

ラオス訪問記 **夢が実現**

新校舎の贈呈式でカプー村へ

2年前のラオス研修旅行で決意した校舎建設

佐藤さんご夫妻は長年教師を勤められ、さまざまなお考えが学校建設に込められています。今回佐藤さんに手記を寄せていただきました。

盛岡市 佐藤静子

夢ではなかった。燦然と輝く太陽の光を浴びながら広々とした大地にしかと小学校の新校舎が建っていた。



忘れられない今年の4月25日。村中あげての大歓迎・新校舎贈呈式。子どもたち村の人たちの喜びに満ち溢れている姿を見、夫も私も感無量のあまり涙ぐんでしまった。

新校舎建築への資金援助をしようと決心したのは2年前、主人との初めてのラオスへの研修旅行の際であった。こんなにも早く夢が実現するとは思ってもみなかった。これもひとえに民際交流センター、現地の教育委員会、そして村民の皆様のお陰であり、心から感謝している。

2人とも年金暮らしのなかで、生活費などを見直し旅行等にもいったつもりで貯金し、資金作りを始めた。大病を患い病気がちな私は、途中何度と無く最後まで援助が続けられるか心配だった。それでも「元気な今のうちに少しでも何かの役に立ちたい」と自分に言い聞かせ、叱咤激励しながらつづけることができた。

「人類の平和と幸福のために、命 愛 光」のプレートを校舎に掲げてもらった。

式典の後、みんなで記念樹を植えた。「この木は丈夫で生長が早く長生きし大木となる木です。必ずどんなに大きくなっているか見に来てください。校舎は大事に末ながく使わせて頂きます」と何度も固く手を握りしめられた。あの温かな手が昨日のように思い出される。きっと今はしっかり根付き、子どもたちひとりひとりの夢を育み、学校をしかと見守りながら大きく育てていることだろう。

翌日、再度新校舎を訪れた。目をきらきら輝かせ、真剣に授業に取り組んでいる子どもたちの姿を見て、「夢でなく、喜んでもらって本当によかった。頑張ったかいがあった。」としみじみ実感でき、主人と私も嬉し涙が込みあがっていた。

「やっぱり思い切って決断してよかったね。」と話しながら、あの子どもたちの健やかな成長を願って喜んでいるこの頃である。

“BOOKが開く子どもの未来”がスタート!

不要な本・CD等が奨学金に

大手中古書籍販売業者に以下の品を買い取ってもらい、その代金を奨学金にします。事務局までお送りください。



【お送りいただける品】

・文庫 新書 単行本 コミック単行本 雑誌(月刊/季刊) 豪華本(美術書等) ゲーム攻略本(発行後5年以内) 参考書/辞書(発行後3年以内) 児童書 写真集 CDアルバム(シングル不可) DVD(映画等) VHSビデオ

【お送りいただける品の数】

合わせて50点(みかん箱1箱)以上からの受付。

【注意事項】

・書き込み・蔵書印、シミ等の汚れがある品は不可。
 ・通販カタログや同人紙、百科事典・白書は不可。
 ・ジャケットや歌詞カードに傷みがあるものは不可。
 ・当事務局までの送料はご負担願います。
 ・「BOOKが開く子どもの未来」名義の奨学金になり、本等を寄付をした方の名義になりません。予め了承ください。

【送付・問い合わせ先】

日本民際交流センター(住所は12ページ下を参照)

メール: info@minsai.org Tel: 03-5292-3260

送付の際、お名前・ご住所・連絡先を明記して下さい。

受領・お礼状が不要の方は、その旨明記して下さい。

「事務局活用リスト」12ページの18番を参照。

1月のタイ自転車研修旅行、現地集合・解散のBタイプ参加なら、まだ間に合います

08年1月19日(土)~26日(土)のタイ自転車研修旅行は成田集合解散の参加(Aタイプ)はすでに締め切らせていただきましたが、タイのホテル集合解散(Bタイプ)による参加ならまだ間に合います。旅行代金は11万円です。申込締切は12月25日(火)です。なお、今回の訪問先はノンカイ県に変更しました。お問い合わせは担当児玉または本田まで。



< 前回の参加者の感想より抜粋 >

2007年2月5日から6日間、タイ東北部を中心とする「感動体験旅行」に参加いたしました。生涯忘れられない「心からの満足と感動」を得ることとなりました。村の滞在は、懐かしい昔に帰ったみたいにホッとしましたが、日本で失われつつある人の優しさや穏やかさ、目上の人を敬う心がしっかりと根付いているからと思われ、今後もこの国の人々の優しさに触れたいと思いました。村では、太道(日本の武道)を教えて、子ども達と一緒に汗をかきました。村長の長いお祈りの後、幸運と健康、そして旅の安全祈願として、私たちの手首にたこ糸を巻いてくれた儀式も、親しみ一杯の多勢の村人達に囲まれ、まるで世界の幸せ者になったみたいで少し落涙。先進国への旅行では味わえない純朴な人たちとの交流による「感動の旅」、「自分探しの旅」ともなり、ぜひ再訪問する所存です(児玉忠則、左から二人目)。

5 回目は、キッズも加わり、より説得力のあるゴスペル・コンサートに！
12 口分の奨学金に

ヤマハ・ゴスペル スギモト・クワイア 代表 杉本智孝

2007 年 7 月 21 日(土)千葉県木更津市の木更津市民会館大ホールにて、ヤマハ・ゴスペル スギモト・クワイアによる「第 5 回チャリティー・ゴスペル・コンサート」が開催されました。会場は夏休みの初日ということもあり、小学生や家族連れの姿が多く見られました。今年は、木更津市民会館の企画で小・中学生を対象にゴスペル・ワークショップが開催され、そこに参加した 22 名の子どもたちも「きさらづ・キッズ ゴスペル・クワイア」として出演しました(写真右下)。子どもたちが登場することで「ダルニー奨学金」呼びかけのメッセージが、より説得力のある内容になりました。

コンサートを作り上げるには苦労もありますが、大変やり甲斐もあります。ステージで全力で歌い、その結果、こうしてチャリティーにも協力できるということは、私にとりましても本当に幸せなことです。一緒に歌う仲間たちやスタッフの協力を得、そしてコンサートを見に来てくださった沢山の方々からの暖かい拍手に包まれて、今年もコンサートは無事終了致しました。アンコールには、私がかつてロンドンでミュージカルに出演していた時の思い出の曲「Starlight Express」を心をこめて歌いました(写真左下の右から 2 目が杉本氏)。

これからもチャリティーコンサートを通して、一人でも多くの人に「ダルニー奨学金」を呼びかけていきたいと思えます。また、読者の皆様も機会がありましたら是非、コンサートを見に来てください。来年は 7 月 19 日(土)、会場は木更津市民会館大ホールです。



4 年連続で
チャリティーコン
サートを開催

27 口分の奨学金に



2007 年 10 月 7 日、ヴァイオリニストの小谷公子さんが、お知り合いのアーティストの方々と一緒にめぐるパーシモンホール(都内)で、奨学金支援のためのチャリティーコンサートを、民際センターとの共催で開催しました。

2004 年から毎年秋に開催しているので、累計で 87 口ものタイの奨学金になりました。

ボランティア募集

広報ボランティア



ダルニー通信やチラシ、パンフレットのデザイン、WEB サイトの作成。DTP、WEB ページ制作などの経験がある方。

入力ボランティア



MS アクセスを使い、東京事務所にて入力していただきます。経験不問。(原則として支援者のみ)

翻訳ボランティア



和文英訳
 活動報告書などを自宅で翻訳していただきます。
タイ語手紙翻訳
 タイの中学生の手紙を自宅で翻訳していただきます。

応募方法

氏名、電話番号、何のボランティアをご希望か明記の上、担当の関口まで E メール(aiki@minsai.org)にてお問い合わせください。ドナーの方は、登録番号もあわせてご連絡ください。

新規ドナー連絡会の紹介

日の国際交流クラブ:今年8月に発足しました。当会は2個人2グループで、現在4人の子ども達を支援して

います。夏休み中に、夏祭り、盆踊り会場で「わたがし」を販売して奨学金をつくりました。子ども達も喜んでくれました。来年は小中高校に協力を呼びかけています。世界にむけて地域から行動しましょう。

(世話人 宮崎宣典 TEL/FAX 0126-25-2386 : 呼びかける対象は北海道・岩見沢市)

ダルニー団塊の集い:本通信 44 号にて民際側から団塊世代の方々に「Let's 貧困削減に向けて何かをしよう」との呼びかけがあり、この呼びかけに賛同したメンバー数人で何回か会合を重ね、この度「ダルニー団塊の集い」を発足させました。集いの目的は、団塊の世代が培った豊かな経験を生かして奨学生支援を一層拡大することで(エリアは限られています)貧困の削減していくことです。団塊世代の結びつきや民際センタースタッフとの連携を深めることも目指しています。団塊世代の皆さん、ぜひこの集いにご参加下さい。また、知人や友人に是非ダルニー奨学金を紹介して頂ければ、パンフレット等の資料を送ります。(世話人:井波信一 sin_spring@yahoo.co.jp、事務方は児玉忠弘=民際スタッフ kodama@minsai.org)

既存ドナー連絡会の活動

ぶらいさに~:「ホテルポールスター札幌」の無料展示ホールをお借りして4回目のバザーを開きました。これまでのバザーで奨学生となった子どもたちの写真、証書、現地で会った時のレポートも展示しました。初日でAタイプ1人分を売上げ、目標10万円を軽くオーバーした今回のバザー。スタッフ一同の気持ちはすでに来年の5回目へ飛んでいるところです。(バザースタッフ)



連絡会ニュース

遠州ダルニー連絡会:同連絡会世話人の畑寛和さんの招きで、今年10月13日、タイ・サコーンナコン県の奨学生スジッター・メ

ウジャー(愛称フォン)さんとお兄さんのチャイチャナさんが来日しました。畑さんは、6年前にフォンさんの実家があるナコーンパノム県を訪問し、「一生懸命勉強して地域社会のために働く気持ちがあれば、高校卒業の時に日本に招くよ」と約束しました。6年越しの約束が果たされたわけです。静岡県・袋井市の秋祭りに参加したりして日本の文化に触れることが出来ました。17日には神奈川県立大井高校の地理の授業に参加し、同じ年頃の生徒たちと交流を深めました。

21日には静岡商工会議所会議室で今年2回目の「ダルニー茶話会 in 静岡 秋」が開催され、二人の通うパンコーン実業学校校長先生も二人の来日に対して感謝の挨拶を述べました。茶話会には30名以上の参加者が集りましたが、「直接、子ども達の言葉を聞くことができ良かった」「現地の様子がよく分かりました」「参加して本当に良かったです」と感想を述べ、非常に喜んでいました。24日からは京都、大阪を楽しみ、27日、「本当に日本に来ることができるとは、夢のようです。日本のお父さんとお母さんに感謝します。経験を活かして、勉強を頑張ります」との言葉を残して離日しました。



左がフォンさん、右が兄のチャイチャナさん。大井高校で(写真上)、静岡市の茶話会でタイの踊りを披露するフォンさん。右端が畑夫妻(写真下)



第7回ダルニードナー連絡会全国大会 in 浜名湖会議

2007年度のドナー連絡会議が7月14日~15日、静岡県浜松市の「浜名湖館山寺荘」で開催されました。今回は遠州ダルニー連絡会が主幹事となりました。台風の進路を気にしつつ、21名のご参加をいただき厚く御礼申し上げます。「誕生20年を迎えたダルニー奨学金」について皆様の熱い討論が繰り広げられ、この奨学金に対する思いの深さが感じられました。

1日目は開催挨拶のあと参加者紹介、民際事務局より活動報告、各連絡会および個人の活動報告と続き、夕食後は参加者の交流がにぎやかに行われました。2日目はタイ東北地方在住8年の森田氏からタイでの体験談や子どもたちの様子について報告していただきました。その後、「20年を迎えたダルニー奨学金の次の一歩」をテーマに話し合いが行われました。会議終了頃には台風一過のさわやかな青空。来年は首都圏での開催となります。(世話人 畑寛和)

